死を待つ身なれど

余りな、三井の冷い仕打ち
新労組員も目覚めよ

投書　一じん肺患者

夏も過ぎましたが、組合員皆様方はご健康で居られる事と思います。働く労働者は体一本が唯一つの財産です。坑内労働は、他の会社より悪条件・重労働。しかも賃金は最低ですから、奥様方も内職等で大変と思います。十分、体に気をつけて下さい。

三池炭鉱では尊い殉職者の発生を見ますが、遺憾に堪えません。災害が起こるたびに、会社の鉱長や部長は、「今後重大災害の絶滅はもちろん、瀕発災害の防止に特別の努力を払い、安全作業の徹底に万全を期したい」といいますが本当は生産第一、保安は第三というところではないでしょうか。

坑内の事は、一歩誤まれば絶対に取り返しのつかない災害につながる事は、彼等は百も承知のはずです。本当に、保安についてやる気があるなれば必ず出来る。やる気がないからこそ、災害を繰り返すだけです。

会社は、「皆様方の協力をお願いする」と申されますが、なるほど保安が万全であれば出炭能率の%も上がるのです。今後、一人の負傷者も出ない事を特に要望致す次第でございます。

私も、終戦後三川鉱に入社。強制的に掘進工を命ぜられ、重労働に追い回され、十数年前に退職致しました。職業柄、後に残ったものはじん肺症です。

今、じん肺患者となり、十年近くの入院生活。盆も正月もなく、ベッドの上で療養致し、今は考える事もなく、死を待つより外に道はないのです。三井の冷たい仕打ちに怒らずに居られません。

三池労組は、災害の起こるたびに三池新労組員、社外工など差別なく抗議ストライキを打っていく。それに引きかえ、新労組員はそのストライキのたびに、酒肴料として金五百円会社からもらって喜ぶ。

新労組員は同じ人間でありながら、会社との間に組合が〝平和協定〟を結んでいる、というので金で命さえ売っている。

新労組員よ早く目を覚まし、自由の身となって、会社と堂々と闘って、安全なる職場を勝ち取り、三池労組員と協力される事を望みます。

三池労組の皆さま、最後の勝利あるまで頑張って下さい。時節柄ご自愛の程をお祈り申します。

石ころか人間の命

残酷のきわみ夕張炭鉱注水

千二百名の手記〝読者の目〟に

「これをぜひ新聞〝みいけ〟で紹介して……」と、一つの新聞記事が提供された。それは毎日新聞十月二十八日付の朝刊の〝読者の目〟欄の「声」のひとつだった。見出しに「残酷のきわみ、夕張炭鉱注水」とあり、見れば三池闘争の犠牲者「千二百名」の一人―西川嘉一さんの手記。明らかに、先の北炭夕張新炭鉱の大災害に対する怒りの爆発だった。

あえて全文を次に紹介する。

三池大災害のときの写真．坑内から脱出できたものの、あとこの労働者はどうなつたものか。こんな悲惨な災害が、こんどは北炭夕張新鉱でも……。許されることだろうか。

手記の全文

三池の千二百名が首切りの通告を受けた時、夕張炭鉱の兄弟たちは、坑内帽一つぶらさげ、ホッパーの下へかけつけてくれた。

あれから二十一年。首を切られた私は、今日も生きているが、あの時私達を支えて闘ってくれた兄弟たちは、地底で倒れた。今、兄弟たちの遺体が坑底にあるというのに、注水が行われた。非情、残酷のきわみだ。

人間の命が石ころのようにもてあそばれる。そんなことがあってもいいのだろうか。

働く人間の生命を大切にする政治など、いまの政府に期待はしていない。だが、革新といわれる政党と、労働者の立場に立つ労働組合が日本にあるなら、スローガンだけでなく、行動でその実を国民に示してほしい。

×

なお、西川さんは今年五十六歳で、今滋賀県に在住。

かわら版

生かさず殺さず…
ウム、労務管理はきわめて順調！
――社長

生産計画
今期の消耗品は何人かな
――所長

日曜・残業・人車増発
ゼニはやらんと、ようがまだしよるわ。ワッハッハッハー
――鉱長

保安係長、通産大臣表彰受く
ドウナッテイルノ？
――三池炭鉱の犠牲者

×

右は、十四分会（三川）新聞〝あせ（十月二十日付）から紹介しました。組合員・家族の皆さん、この欄に傑作をどうぞ。

――編集部

高齢者中央集会に参加して

手記・宮本隆吉

九月十五日は敬老の日。東京都立体育館で行われた中央集会に、私は三池退職者の会を代表してひとり参加した。

話し相手もないひとり旅。不安でならなかったが、熊本県評から参加された住田さんがいろいろと面倒を見てくれたので、快適な旅ができたことに感謝している。

会場に着いて先ず感じたのは、一万人の大集会だけあって、さすがに広い体育館前広場もゴッタ返す人の波で一ぱいだったこと。

会場入口の受付には、高齢者のお世話をする総評各単産の現役の人びとが、親身に応対してくれているのが印象的であった。敬老の日に相応しい風景だ、としみじみ感じた。

集会では、NHKの酒井アナウンサー、歌手の小鳩くるみさんが司会役をつとめ、豪華な会場風景だった。「来て良かった」、という気持は私一人ではなさそうだった。議事にはいる、情勢のきびしさがひしひしと伝わってくる。総評を代表して、槙枝議長の基調報告。社会党、共産党、公明党や新自由クラブの来賓挨拶。言われる言葉は同じで、「第二次臨時の一斉ストライキとあわせ、全国から高齢者を動員して中央行動を行うことが宣伝され、満場の拍手をもって承認された。

会場を埋めた私達高齢者は、戦前、戦中、戦後と、日本のもっとも苦難な時代を生き続けてきた人びとである。やっとこれからというときになって、「大幅に生活費を値ぎる行革は絶対に許せない」と私は思った。

以上で、報告を終りとする。

×

みいけ退職者の会機関紙（十月十五日発行・NO四五）から転載しました。

許せぬ福祉切り捨て

軍事費だけ増やす行革

行政改革の中身は福祉見直し、弱者切り捨て、軍事費だけは増大する危険な道」、と訴えられた。だから、十月中旬以降の、行革国会の最終段階では、福祉切り捨てを阻止する対国会闘争として、総評

旅行記

五島への旅

十九分会（三川）　田中繁満

往きは飛行機、かえりは船で仲を取りもつ五島灘。

今年の旅行は、エメラルド色も印象的な五島列島、荒川をえらんだ。

総勢十七名（女性三名含む）秋晴れのなかを福岡空港に。バスのなかでみんなの顔を見て、この一年間の旅行計画の苦労が吹き飛んだ。

みんなの目が、三千メートル上空の飛行機の窓より、眼下の海に空に、海岸線にくぎづけになっている。

五十五分間の空の旅が終り、空港に着く。待っているバスでこんどは一路五島観光に。

全山芝生に覆われ、かっては活火山であった鬼岳。ナイーブな綾線は女性的で、山頂より福江の海が一望のもとに見渡せる景勝の山である。

鐙瀬（あぶんせ）の熔岩海岸。鬼岳が活火山時代に噴き出した熔岩で形成された汀線で、真岩、怪岩と変化にとみ、熱帯・亜熱帯の植物も自生している。この自然の造形に、美しい海にみんなときの過ぎるのを忘れて見いっている。

観光バスのなかで一パイの酒がはいると、話もはずむ。小生は、全行程が安全なる事を祈るばかりで、見物どころではない。バスの費用が一円でも安くてすむように見物しなければ、損、損だ。

ともあれ五島列島最大の福江市は、五島藩二万五千六百万石の城下町。歴史を伝える石田城趾や武家屋敷の石垣が、ひしひしと時代の流れを感じさせる。

大瀬崎灯台。祈りの女神像。観光は続き、七ツ岳荘につく。

気になり、バスの料金を計算して見る。予算をオーバーしていた。頭のなかでの計算はそんなはずではなかったが、かえりのバス代がない。さあ大変だ。

みんなは、さっそく風呂に。すでに笑顔で語り合いながら、一パイやっている人さえいる。なかには待ち切れずに、海に魚釣りの下見に行く人さえいる。

ところで、島の人びとはみんな良い人たちだった。私は、往復の機内の窓より、あの美しい海岸線、澄み切った海、何でともなさそうな家なみを見て、自分は一発の核弾頭をこの下界に落とす勇気があるだろうか、とふと思った。そう思ったとたん急にいい知れぬ肌寒さをおぼえたものだった。

こうして今度の五島旅行は、私に平和のありがたさをも教えてくれた。つくづく、こんなにも美しい地球を破壊してはならないことを、思ったものである。

×

職場の皆さん、行楽の秋―皆さんは、仲間同志思い思いの旅などを楽しんだのではありませんか。忘れ難いエピソードなどもあったのではないでしょうか。どうぞ、本紙へ思い出などをどしどしご投稿ください。写真もお待ちします。

――編集部

五島と本土とをつなぐ船の上で。なんと晴れぼれとした顔だろう。また、明日からはきびしい労働がまつている。